

新潟県支部報

マイ スコープ

「上越に来たユキホオジロ」 上越市 佐藤 真

1997年1月5日のことである。その日、シノリガモ、ウミアイサ、ミミカイツブリを見た旨を新保勝司氏に報告した際、「今日、ユキホオジロを見ました」とのこと。翌日、直江津港に駆けつけた。岸壁に続く埋立地に車で近付くとパッと数羽の白い鳥が飛び去った。数日後の朝、雪が降っていたが明けるのを待って港に行った。岸壁近くのテトラポットの上に雪を楽しむかのように6羽のユキホオジロが戯れていた(写真)。判別しにくいだが、雄4羽、雌2羽。

荒れ地にわずかの枯れ草がある。まわりは工事現場でダンプが行き来している。こんなうるさいところによくいるものだ。鳥たちは地面にあるわずかな枯れ草(イネ科)種子を

食べているようだ。すぐ横の枯れ草におおわれた土手とこの荒れ地を行き来していた。また、地面の草に新芽が出る頃にはこれを食べているのが見られている。その後、2月5日5羽(雄3、雌2)3月4日4羽、3月10日3羽(雄)、3月15日1羽(雄)とだんだん少なくなり、最後は3月18日雄1羽が確認されたがその後は見られていない。(加藤信孝、古川弘、中川直剛氏らの観察)1月5日から3月18までの長い間越冬し、われわれを楽しませてくれた。

なお上越への飛来は1983年2月雄1羽、1992年1月雄7羽が確認されている。場所はいずれも同じ直江津港のほぼ同じ場所である。



夏鳥生息調査報告

研究部：小池重人・小野島学・木下 弘・中山正則・末崎 朗

1. はじめに

昨年度(1996年)は、会員の方々のご協力で29カ所の生息調査を行うことができた。調査地の中には日を違えて2回以上調査をしていただいた場所もある。これに1995年の奥胎内の調査記録をつけ加え、表1に30カ所の調査地および調査者を掲載した。これらの調査は、基本的に過去の記録と比較したもので、おもに「鳥類生息状況調査報告書、1982、新潟県」を基にしている。

全調査地で過去および今回の調査で記録された種は102種で、そのうち留鳥が59種、夏鳥が37種、旅鳥・冬鳥が6種であった。過去との比較が可能な調査地は28カ所で、比較した調査年月日を表1に示した。過去の記録はおもに1980年前後で、今回の調査とほぼ15年の開きがある。それを基に留鳥と夏鳥、種数と個体数を比較した結果、平均して種数と個体数に減少傾向が見られた。夏鳥と留鳥を比較すると、種数ではやや夏鳥の方が減少傾向が大きかった(表1、図1)。個体数では留鳥の値が大きいが、これはヒヨドリやムクドリなどの群れを観察したか否かによるものである(個体数は10kmあたりの数で示した)。

しかし種によっては個体数が増加したのもあり、種ごとに分析する必要がある。例えばセンダイムシクイは平均5.9羽減少しているが、キビタキは平均1.6羽増加している(図2)。個体数の変化を示すことで増加や減少の傾向はある程度はわかるが、それだけでは状況を適格に把握するには至らない。そこで種ごとに、減少傾向(消滅・減少)・変化なし・増加傾向(増加・出現)・未生息の調査地にまとめてみた。たとえば、ブッポウソウが減少

した調査地は2カ所で、比較した調査地28カ所中の7%である。しかし、もともと生息していない場所に対する割合では意味がない。そこで、生息していた調査地だけを対象にすると減少した場所は100%になる。減少を示す基準としてはこちらの方が状況を正確に示しているので、減少地域については生息地についての割合を示した。

2. 具体的な生息状況

記録された中から25種を選び、以下に個体数と減少地域の状況を示した(表2、図3)。

・ホトトギス類

カッコウは2.6羽減で減少地域は43%、ツツドリは1.4羽減で減少地域は38%、ホトトギスは2.9羽減で減少地域は35%であった。カッコウは消滅した地域が8カ所と多かった。

・ヨタカ

もともと記録した調査地は少ないが、全く記録されなくなった。2.7羽減で減少地域は100%である。関東地方でも激減していると情報がある。

・アカショウビン

減少傾向は大きく、3.4羽減で減少地域は83%に達し、そのうち2カ所で消滅した。

・ブッポウソウ

もともと生息地は少なかったが、全く記録されなくなった。12.5羽減で減少地域は100%である。一方、奥胎内では、1995年のセンサス調査後、少数が出現している。

・キツツキ類

アオゲラは0.7羽減で減少地域は35%、アカゲラは1.0羽減で減少地域は46%、コゲラは1.8羽増で減少地域は40%である。それほ

表1 調査地と調査者および種数・個体数の変化

番号	調査地	代表調査者	調査距離 km	調査年月日 現調査 — 過去の記録	種数			種数増減		個体数増減/km	
					計	留鳥	夏鳥	留鳥	夏鳥	留鳥	夏鳥
1	朝日村駕川	小池 重人	2	96/5/21 — 78/5/26	37	22	15	-6	0	-80.0	-8.0
2	関川村駕の樂	加藤 誠一	2.5	96/6/14 — 80/6/18	37	24	13	2	2	2.0	-0.8
3	奥胎内	小池 重人	3	95/6/10 — 81/6/9	37	23	14	-9	-7	-12.0	-12.3
4	加治川溪谷	熊倉 了一	3	96/6/20 — 79/6/17	27	17	10	3	-7	-4.7	-15.3
5	太夫浜	小池 重人	3	96/6/5 — 79/6/5	33	21	12	7	-2	50.7	6.7
6	弥彦山	小野島 学	3	96/6/20 — 81/6/21	37	23	14	-7	-5	-0.3	-5.7
7	角田山	千葉 晃	3.1	96/6/2 — 80/6/1	37	18	19	-6	-9	-10.6	-5.8
8	菅名岳	尾巻 秀雄	3.5	96/5/31 — 87/5/31	35	19	16	-3	-5	-5.1	-4.9
9	三川村新谷	木下 徹	4	96/6/2 — 81/6/21	45	32	13	5	-3	-30.8	-8.3
10	麒麟山	山賀 哲夫	3	96/5/31 — 78/5/29	34	25	9	3	2	-4.0	0.7
11	上川村月山	小池 重人	1	96/5/19 — 82/5/17	28	16	12	-2	-5	3.0	-6.0
12	加茂市加茂山	木下 徹	4	96/6/2 — 78/6/19	31	19	12	3	1	7.8	0.5
13	見附市堀溝	渡辺 弘雄	3	96/6/8 — 79/6/10	35	22	13	3	-1	-11.0	-2.0
14	三条市妙法寺	渡辺 央	2	96/6/22 — 80/6/20	30	16	14	-1	2	-7.5	-3.5
15	長岡市竹之高地	長谷川 誠	2	96/6/2 — 79/6/3	39	24	15	-3	-1	-211.0	-5.5
16	長岡市越後丘陵公園	古川 英夫	2	96/5/25 — 91/5/25	44	24	20	-1	-4	-3.5	-8.5
17	北魚沼川口町	中山 正則	3	96/5/26 — 78/6/3	28	19	9	0	-1	-3.0	-0.3
18	山本山	中山 正則	2	96/5/25 — 77/5/21	27	18	9	4	1	19.5	-1.5
19	北魚沼守門村	中山 正則	6	96/5/25 — 79/5/26	31	21	10	-2	0	-12.7	0.2
20	六日町広堤	木下 弘	4	96/6/9 — 81/6/16	48	32	16	-7	0	-2.8	3.8
21	湯之谷村	柳藤 昭彦	4	96/6/7 — 81/6/1	46	26	20	0	4	-2.5	0.5
22	十日町猿倉江道菅沼	古沢 昭三	2	96/5/19 — 77/6/10	38	25	13	-3	2	-6.5	5.5
23	十日町名ヶ山	古沢 昭三	2	96/5/26 — 78/6/5	33	22	11	-3	-1	-25.0	-3.0
24	柏崎市谷根	小林 成光	3	96/6/13 — 80/6/22	37	23	14	-3	0	-4.3	-1.3
25	柿崎町黒岩	末崎 朗	4	96/6/2 — 79/6/10	31	22	9	-1	-2	-0.8	-2.3
26	春日山	山本 明	3.5	96/6/14 — 78/6/17	38	27	11	2	3	14.9	3.7
27	新井市高庄山	山本 明	7.5	96/6/23 — 80/6/22	33	23	10	3	5	10.0	2.8
28	妙高	山本 明	4	96/6/19 — 80/6/16	35	23	12	-5	1	-2.8	0.8
29	実川	渡部 通	(2.7)	96/5/25	(41)	(28)	(13)				
30	大倉峠	山賀 哲夫	(2)	96/5/19	(21)	(13)	(8)				
	平均		3.2		35.4	22.4	13.0	-1.0	-1.1	-11.9	-2.5

※ここでは、それぞれの調査地域での比較できる過去と現在の記録を載せてある。

※実川・大倉峠については、比較できる過去の記録がない。

※調査には、小林高臣・古川 弘・後沢 正知・根津 和育の各氏からも協力していただいた。

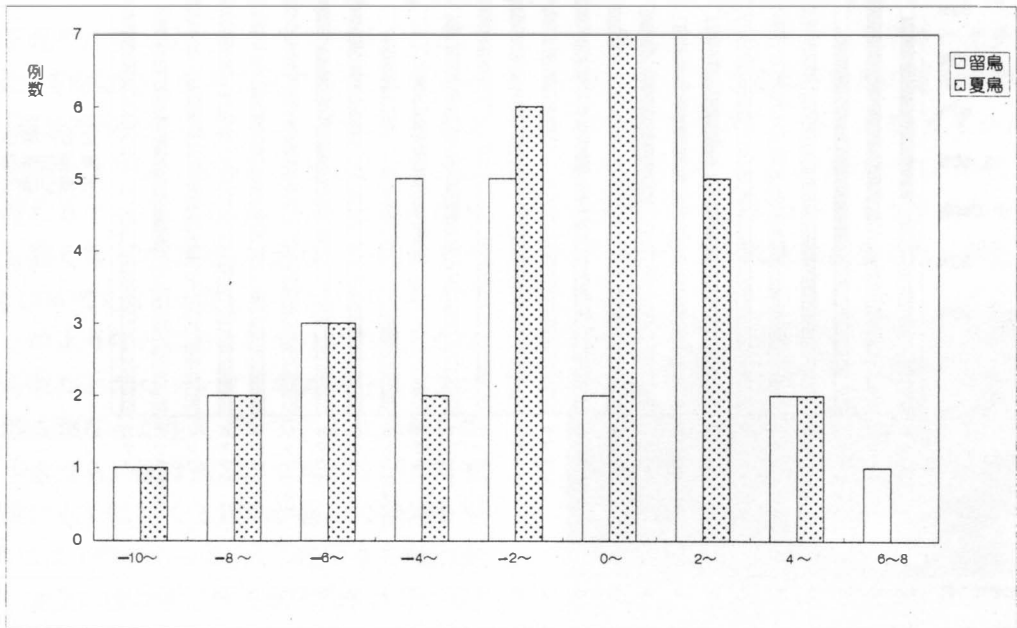


図1 種数の増減状況

夏鳥
留鳥

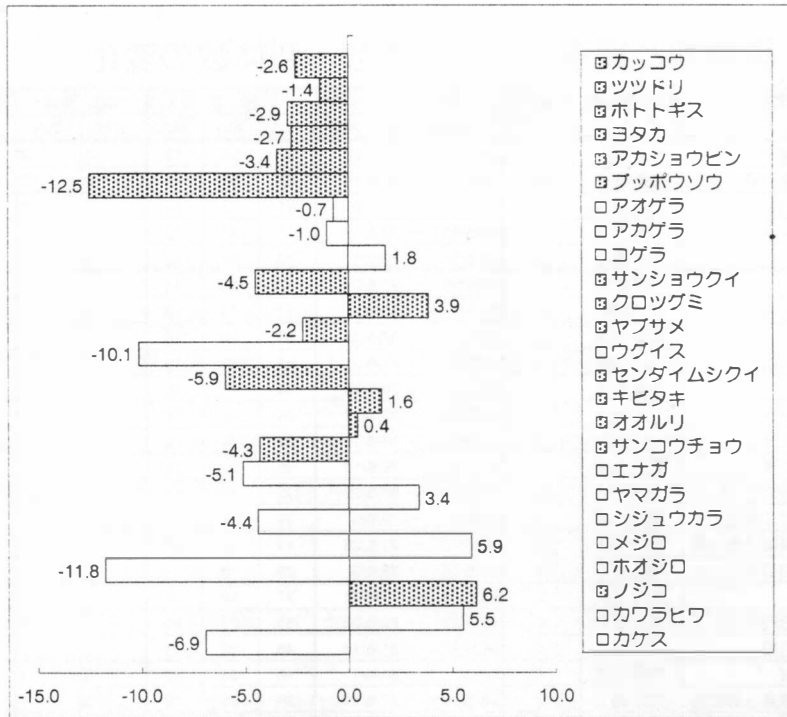


図2 生息地における10kmあたりの個体数の増減

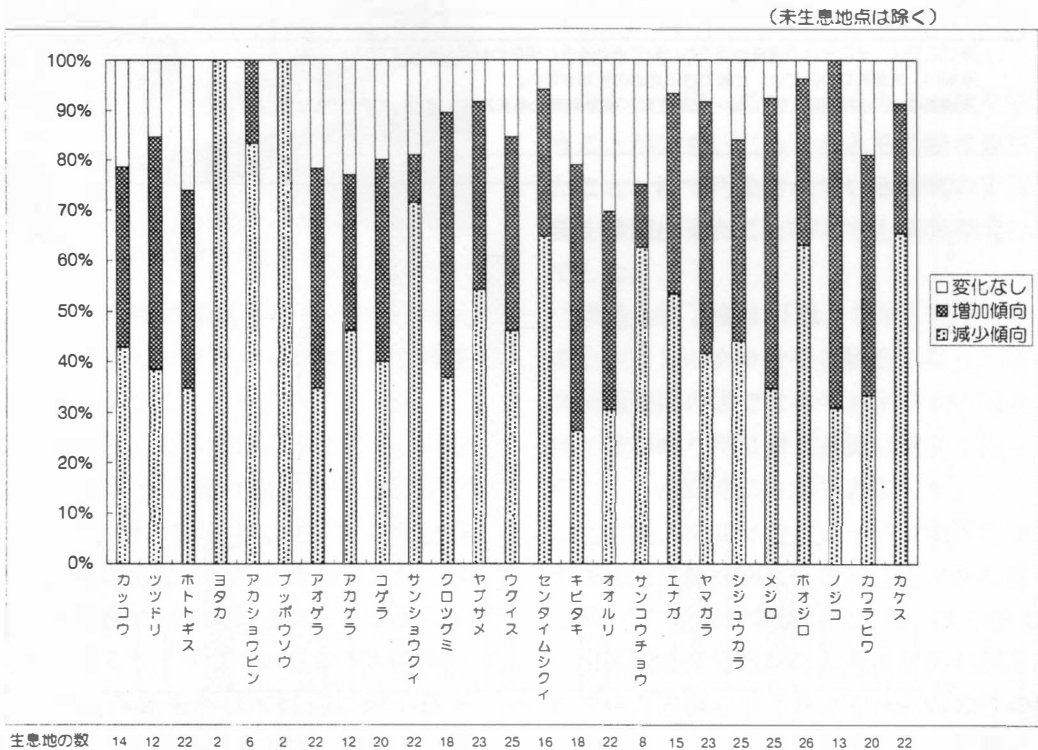


図3 生息地における増加・減少状況

表2 調査地における増減状況

場名	全調査地						生息地					
	消滅	減少	変化なし	増加	出現	未生息	生息地数	減少傾向	変化なし	増加傾向	距離計	個体数/10km
カッコウ	6	0	3	2	3	14	14	43%	21%	36%	43	-2.6
ツツドリ	2	3	2	2	4	15	13	38%	15%	46%	36.6	-1.4
ホトトギス	3	5	6	4	5	5	23	35%	26%	39%	66.6	-2.9
ヨタカ	3	0	0	0	0	25	3	100%	0%	0%	11	-2.7
アカショウビン	3	2	0	0	1	22	6	83%	0%	17%	17.5	-3.4
フッポウソウ	2	0	0	0	0	26	2	100%	0%	0%	4	-12.5
アオグラ	8	0	5	5	5	5	23	35%	22%	43%	70.6	-0.7
アカグラ	6	0	3	1	3	15	13	46%	23%	31%	39	-1.0
コグラ	5	3	4	5	3	8	20	40%	20%	40%	61.1	1.8
サンショウクイ	8	7	4	1	1	7	21	71%	19%	10%	64.6	-4.5
クログミ	4	3	2	4	6	9	19	37%	11%	53%	54.1	3.9
ヤブサメ	8	5	2	4	5	4	24	54%	8%	38%	72.6	-2.2
ウグイス	0	12	4	8	2	2	26	46%	15%	38%	79.1	-10.1
センダイムシクイ	8	3	1	0	5	11	17	65%	6%	29%	47.1	-5.9
キビタキ	0	5	4	7	3	9	19	26%	21%	53%	56.6	1.6
オオルリ	0	7	7	7	2	5	23	30%	30%	39%	66.6	0.4
サンコウチョウ	4	1	2	0	1	20	8	63%	25%	13%	21	-4.3
エナガ	6	2	1	2	4	13	15	53%	7%	40%	41.1	-5.1
ヤマガラ	4	6	2	8	4	4	24	42%	8%	50%	73.6	3.4
シジュウカラ	3	8	4	7	3	3	25	44%	16%	40%	75.1	-4.4
メジロ	0	9	2	10	5	2	26	35%	8%	58%	77.6	5.9
ホオジロ	1	16	1	8	1	1	27	63%	4%	33%	81.6	-11.8
ノジコ	1	3	0	3	6	15	13	31%	0%	69%	39	6.2
カワラヒワ	1	6	4	8	2	7	21	33%	19%	48%	69.1	5.5
ガケス	10	5	2	-3	3	5	23	65%	9%	26%	73.6	-6.9

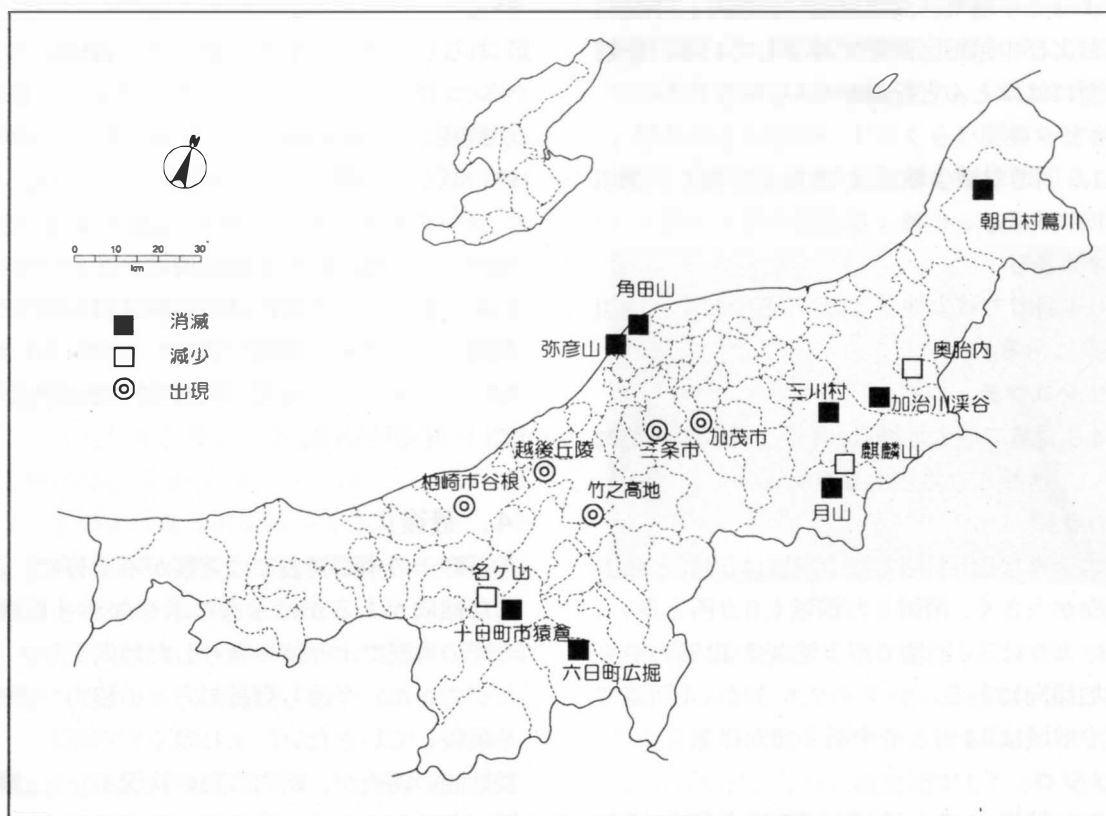


図4 センダイムシクイの確認状況

ど減少していないが、消滅した地域が多く、アオゲラは8カ所で消滅している。

・サンショウクイ

4.5羽減で減少地域は71%である。減少傾向が大きく、消滅した地域も8カ所と多い。

・クロツグミ

3.9羽増で減少地域は37%である。全体的には増加傾向にある。

・ヤブサメ

2.2羽減で減少地域は54%、消滅した地域が8カ所ある。

・ウグイス

個体数の減少傾向は大きく10.1減少地域は46%である。

・センダイムシクイ

5.9羽減で減少地域は65%と減少傾向が著しく、消滅地域も8カ所と非常に多い。しかし一方では、今まで生息しなかった地域に出現している。この状況を図4に示した。これによると中越地区北部付近に出現し、下越以北および中越地区南部で減少している。上越方面にはほとんど記録がない。

・キビタキ

1.6羽増で減少地域は18%と少なく、増加傾向にある。

・オオルリ

0.4羽増で減少地域は25%と少なく、増加傾向にある。

・サンコウチョウ

4.3羽減で減少地域は63%と減少傾向が大きい。消滅した地域も4カ所と多い。

・カラ類

エナガは5.1羽減で減少地域は53%と減少傾向が大きく、消滅した地域も6カ所と多い。ヤマガラは3.4羽増で減少地域は42%とやや増加傾向にある。シジュウカラは4.4羽減で減少地域は44%とやや減少傾向にある。

・メジロ

5.9羽増で減少地域は35%と増加傾向にある。

・ホオジロ類

ホオジロは11.8羽減で減少地域は63%と減少傾向が非常に大きい。一方ノジロは6.2羽増で減少地域は31%と増加傾向にある。

・カワラヒワ

5.5羽増で減少地域は33%と増加傾向にある。

・カケス

6.9羽減で減少地域は65%と、減少傾向が大きい。

3. まとめ

以上25種について、減少増加状況について述べた。必ずしも夏鳥だけが減少しているわけではなく、留鳥でも減少が激しいものもある。理由として越冬場所の環境の悪化も考えられる。ホオジロの場合はむしろ二次林の成長によって明るい林が暗くなり生息に適さなくなったのかも知れない。森林の成長は同時にキビタキやメジロの増加を促したのかも知れない。それにもかかわらず、森林にすむサンコウチョウやサンショウクイなどの夏鳥が激減しているのは、やはり越冬地域の熱帯林の減少が影響している可能性が大きい。

センダイムシクイの場合は温暖化による少雪で、この種が好む季節的環境が変わったのかもしれない。あるいは地域個体群の越冬地が違っていてその環境が変化したのかもしれない。今後もっと各地の状況を詳細に把握していく必要がある。

4. 最後に

一昨年の中間発表では考察が不十分で、どんな傾向があるかはっきり示せなかったが、今回の考察でよりはっきりした傾向を示すことができた。今後も会員の方々の協力で調査を継続していきたい。より多くの地域および長期間の調査が、県内の鳥の状況を正確に把握できると考えている。

レンジャクとの出会い

新潟市 久保田千華子

小雪混じりの日の事でした。いつものように職場に来ると、その日は妙にヒヨドリが群れています。珍しいなあと思い、目を上げると職場前の電線に、ビッシリと何か止まっています。大きさはムクドリ程、こんなに群れて、もしや冠羽は、と目を凝らすと確かに冠羽有り、エー、まさかまさか？と思う私の目の前にヒラヒラヒラと舞い降りた鳥はまさしくレンジャクでした。淡いシックなグレーの体に歌舞伎のようなくまどり、翼と尾羽に美しいろうを落としたワックスウイング。憧れの鳥との、あまりに唐突な出会いに、我を忘れて「レンジャクだ、レンジャクだあ！」と叫ぶ私。行人が二・三げんな目をして通り過ぎました。

喜びと興奮は迎えがたく、どうしよう。そうだ誰かに言わなくては、と早速主人に電話。人に話して落ち着くつもりが話してるうちにますます興奮してくる始末。仕事もまるで身が入らず、窓辺ににじり寄って行きたい衝動を抑えるのがやっとでした。昼休み、急いで外に出てみると、レンジャクは一羽もいなくなっていました。電線の下は、黒い実をたわわにつけた植え込みが並んでいて、彼らはその実を食べに来ていたようでした。それにしてもなんと美しい鳥でしょう。降りしきる雪の中、その体のグレーはつややかにビロードのような光沢を放ってみえました。そして翼にはろう細工のような鮮やかな彩色。創造主のセンスに脱帽です。

翌朝、いつもより1時間早く職場へ。今度は主人と2人、双眼鏡とフィールドスコープを手に駆けつけると、やはりいます。電線に植え込みに、いたる所にレンジャク達。数えてみると100羽近くの群れのうち、ほとんどがキレンジャクで、その中に2羽だけヒレン

ジャクを確認出来ました。電線から、10数羽単位で植え込みの中に舞い降りては、黒い実をついばんでいます。食欲旺盛ではありますがその様はととても優雅です。キリリとした高貴な顔立ちはどこかエキゾチックで、大きな羽飾りの帽子をつけた異国の貴婦人達といった感じでしょうか。人をあまり恐れる様子もなく、1メートル程まで近付いても大丈夫でした。この日も、彼らは午後になると姿を消しました。食事をする時間帯が決まっているのか、それとも、この辺りに多い飼い猫達が家の外に放たれる時間と一致するのか、はっきりとした事はわかりませんでした。またレンジャクは食物を消化するサイクルが速いと聞きましたが、あっという間に消化するのか、とにかくこの群れの糞の量はものすごく電線上からひっきりなしに糞が降ってくる状態でした。またその形状もほとんど未消化なのではないかと思われる程で、どのように栄養摂取出来ているか不思議です。ちょうどその頃、長野県でレンジャクが多数不審な死に方をしているなどのニュースがあり、ここは大丈夫と思われましたが、1羽くらい間違えて落ちてはいないか、とふらちな心で探してみましたが幸い1羽の落伍者も無かったようです。



キレンジャク

次第に植え込みの実食べ尽くされ、あれほどあった実が当初の1割にも満たなくなった頃、彼らは忽然と姿を消しました。1月27日から30日、たった数日間でしたが、寒い季節に心踊る出来事でした。彼らが皆無事に旅立ってくれる事を願わずにはられません。

白夜の中の鳥たち（Ⅲ）

南蒲原郡栄町 渡辺 央

チャウンステーション

北極海に面したシュミット空港のホテルで初めての白夜を過ごした我々は、7月3日、いよいよ最終目的地であるチャウンステーションに向う大型ヘリコプターの中にいた。低空で飛ぶヘリコプターの眼下には、広大なツンドラがさまざまな表情を見せて続いている。窓を開けてその大地を次々に写真に撮る。やがてツンドラの中にバンガローのような三角屋根の建物が、5棟ほど見える。チャウンステーションである。ヘリコプターを降りると管理人一家と2匹の犬、そして今回我々の案内をしてくれるというゲナジー博士の全員が出迎えてくれた。気がつくとき暖かいのである。蝶も飛んでいる。蚊が点々と身体中に止まっていて、額の辺りをもう3カ所ほど刺されていた。これは明日から採鳥もさることながら昆虫採集もできるかと期待した。



警戒して飛びまわるクロトウソクカモメ

わいわい言いながら湿原の中の木道を渡って荷物を運び、今日から9日間過ごす建物と部屋が割り当てられた。私は狭いながらも一人部屋で、窓のカーテンを開けると窓越しにどこまでも平坦なツンドラが続いていた。チャウンステーションは、マガダン州立北方生物問題研究所附属チャウン野外ステーション

というのが正式名所である。北極圏の自然と人との関わりをいろいろな面から研究しており、コハクチョウの生態調査、標識調査などにも大きな実績を持っているところである。しかし、今年いっばいで管理人の一家がマガダンに移るということで来年からは閉鎖するというのであった。



美しい夏羽のハマシギ

午後7時半の夕食は、全員が別棟にある食堂に集まってとる。最初の夜の夕食の内容をちょっと紹介すると、チャーハンらしきもの、主人が先日釣り上げたというサーモンの塩蔵、サラミソーセージ、黒パン、ボルシチ、キュウリのサラダ、トマトなど果物各種などであった。ウオッカやコニャックは各自でたのむ。我々は毎晩ウオッカ一本をあけていた。食堂から隣にある建物の屋根を見ると、ユキホオジロが盛んに出入りしている。育雛中のようだ。私は翌日、このユキホオジロの育雛の様子をこの食堂から徹夜で観察することになる。私たちは白夜のために眠るのに苦労するからということで、全員がアイマスクを用意してあった。しかし、毎晩ウオッカの効き目で、ほとんど使うこともなく、この最初の夜も午後11時頃にベッドに入った。真夜中喉が渇いて目が覚めた。0時45分である。カーテンを開けると、日本の夕暮れのように

うな薄暮の中に褐色のツンドラが広がっていた。地平線のかなたに太陽があり、赤紫色に染まった空があった。太陽はそのまま沈むことなくまた昇る。自家発電用の機械の音が遠く聞こえるが、ツンドラ全体が眠りの中にあるように静である。シロカモメが1羽ゆっくりと窓を横切る。少し先にクロトウゾクカモメの番いが見える。そのはるか遠くに白い点が、1つ、2つ、ハクチョウである。



カナダヅル

ツンドラを歩く

7時頃に目を覚ますと、薄曇りのような空で、風が少しあり、昨日とはうってかわって寒い。この日からこのような寒い日が帰る日まで続いた。そのため滞在期間中蝶はおろか蚊1匹見ることはなかった。朝食後、これからの下見をかねて全員ツンドラを歩くことになった。支度は完全な冬支度で、そこにウエーダー(腿までの長靴)をはく。しかしツンドラはぶくぶく沈むような所はほとんどなく、近くを流れるチャウン川の岸に沿った場所などは少し高くなって乾燥しており、一面にヤナギ(といっても10cm位しかない)が生えている。このようなところには地リスの巣穴が多く見られた。ただツンドラの大部分はミズゴケや地衣類などが生えていて、ふわふわ歩いて歩きづらい面はある。クロトウゾクカモメの巣の近くに行くと親鳥が盛んに擬傷をやる。巣には1卵があった。大小幾つもの湖沼があり、水面にはコオリガモが3羽泳いでいる。その岸边にチリリリリ、という澄んだ鳴き声がして降り立ったのは、美しい夏羽のハマシ

ギであった。やがて抱卵中のコハクチョウの巣に行き着く。初めて見る巣には1卵がある。巣は直径1mを超すが、苔や枯れ草などをうづ高く積み重ねてあり、高さも60cm位ある。しばらく歩くと今度は2卵入った別の巣があり、さらにもう1巣発見したが、この巣は空巣で、今年の繁殖状況は厳しいのではないかと思われた。遠くやや小高くなったツンドラを3羽のカナダヅルが歩いている。ステーションから比較的近い所にある湖沼の中州に062C標識をしたコハクチョウが抱卵中であつた。この巣がステーションから最も近いし、中州で安全だろうということで、白鳥の会の人達はこの岸边にブラインドを張り、帰る日までこのハクチョウを観察することになった。すぐ隣にあるもう一つの湖沼の中州には、60羽ほどのクビワカモメのコロニーがあり、抱卵、育雛中であつた。岸に立つと盛んに我々に攻撃をしかけてきた。またこの中州には、コオリガモとケワタガモの巣もあり、両方とも雌が抱卵中であつた。さらによく見ると、キョクアジサシが1番い繁殖していた。今年の夏はこのキョクアジサシが少ないということであつた。午後1時頃にステーションに戻ったが、初めて歩いたツンドラやコハクチョウの巣卵、日本では冬鳥や旅鳥の夏羽の姿に感激した。この日は他に、スズガモ、オオハム、メガネケワタガモ、アカエリヒレアシシギ、アメリカカウズラシギ、シロハラトウゾクカモメ、ピロードキンクロなどに出会った。



クビワカモメのコロニーのある中州で
繁殖しているコオリガモ

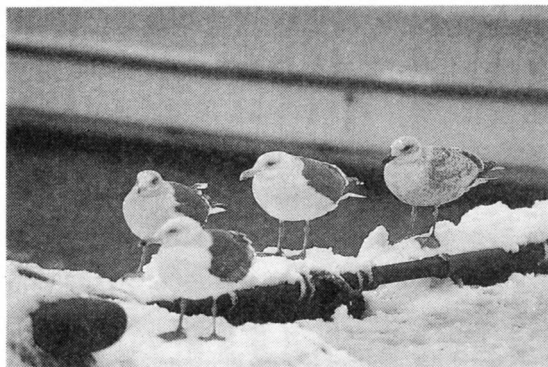
寺泊探鳥会に参加して

新潟市 南雲 静子

平成9年2月2日、晴れ間の広がった冬の日、恒例の寺泊探鳥会に参加しました。

事前に渡辺先生から寺泊の鳥相について概況説明があり、続いてナホトカ号重油流出事故に伴う海鳥の被害状況、被害鳥類の処理方法等について話し合いが行なわれ、参加者一同気を引き締めての観察会となりました。

集会はオープンして間もない寺泊町文化センター「はまなす」で行なわれました。会場を10時出発。出雲崎の「天領の里」まで402号線沿いに海鳥を中心としたウォッチングです。



ウミネコとオオセグロカモメ

私にとって今回の探鳥会のハイライトは、ミミカイツブリとハジロカイツブリの2羽を同時に観察できたことです。

出雲崎漁港近くの防波堤の中でこの2羽が交替にダイビングを繰り返す様子は、丁度「かくれんぼ」遊びに夢中になっている幼児のようで、その可愛らしさと躍動感溢れる動きはいつまで観ていても飽きることがありません。特にミミカイツブリの目の下から胸にかけての前面が光を浴びて純白に輝く様子は、昨年4月下旬粟島海岸で観た赤褐色の頸ともじゃもじゃした顔からは想像出来ない変身振りでした。この白さは頭上の黒と赤い目

をくっきりと浮き立たせとても印象的です。活発に潜水を繰り返すこの2羽を追って「出た出た」「あっ潜った」と私達もすっかり童心に戻り奇声歓声の連発でした。ウォッチャー全員が一体になってその喜びを分かち合える海鳥観察は本当に楽しくなります。ミミカイツブリで興奮した後、海面の大きなうねりの中を漂っているマガモの群れを点々と見つけました。洋上で羽ばたくマガモは、湖沼で観るマガモと違った鳥を観ているようで渡り鳥の力強さを感じさせます。寺泊漁港では、漁船の水揚場を旋回する無数のカモメを観ながら、その識別方法を教えて頂きました。そこで純白のシロカモメに出会えたのも大きな収穫です。探鳥後の鳥合せで、出現数は28種になりました。

見たいと思っていたミミカイツブリに出会うことができ、じっくりとその動きを観察したこと、油で汚染されている海鳥の実態の一部を確認出来たこと等とても意義深い探鳥会でした。

探鳥会終了後は、「はまなす」で役員の方々の心づくしのタラ汁をご馳走になり、各地の鳥情報交換の場ではユキホオジロの写真を見せて頂いたり鳥に対する深い情熱を持った話をたくさん聞くことができました。

帰宅後、テレビのニュースで柏崎海岸での市民総出の重油回収作業の様子が映し出され5,600人の人達が参加したと報じていました。

出雲崎海岸で観察した頭と腹部が黒く汚されていた数羽のセグロカモメ、岩のりのおかげで採餌していた腹の黒かった2羽のシロチドリがテレビの映像と重なった一日でした。

日本海タンカー一事故による海鳥の被害と支部の対応

保護部 山本 明

新年早々1月2日に島根県の隠岐諸島の北100kmで、ロシアタンカー「ナホトカ号」が老朽船のため、船体が二つに割れる事故が起こり、大量の重油が流出し、山陰・北陸・東北の各県に漂着して多大の被害をもたらし、またウトウ・ウミスズメなど数多くの海鳥類が油にまみれて斃死した。



油まみれになって、柏崎海岸に漂着したウトウの斃死体。
写真：小林成光氏

本県支部としての対応

日本野鳥の会（保護・調査センター）は1月上旬、日本ウミスズメ類研究会からの依頼ということで、北陸・山陰の各支部保護担当者宛に調査協力の要請文書を出した。保護部では早速その要請文書の内容で、調査協力可能な方はできる限り海岸を歩いて、油の汚染鳥や被害鳥死体の発見につとめることを願う文書をつくり、探鳥会などの案内と共に事務局から全会員に送付してもらった。発見した死体や弱っている個体は、最寄りの保健所に届けるか連絡するようにし、その時の記録などは千葉副支部長のところへ送るよう、データ収集の一元化を図った。

その後日本野鳥の会からFAX MAILで海鳥調査マニュアル（暫定版）が送られ、また救護資料なども何部か郵送されてきた。これらも早速各地区のリーダー格に相当する方々へ、現物またはコピーで郵送した。

この後は会員各自の行動に期待したのであるが、3/10現在、報告先の千葉氏のところには油被害鳥の観察や死体回収の報告はまだ1件も届いていない。会員による被害鳥死体の回収は今のところ千葉氏の4体だけである。まだ報告していない人や、海岸を歩いてみたが死体を発見できなかった人もいると思われるので、それらも報告してもらって後程今回の取組の総括をしたいと思う。

北陸・山陰の他県支部の取組

OBIC NEWSや3/1～2の評議員会の折に報告されたことを総合すると、島根・鳥取・京都・福井・金沢・石川・富山など山陰・北陸の各県支部はいずれも組織的に1月から2月にかけて何回か海岸をセンサスして、汚染鳥の調査や漂着死体を回収している。特に回収数の多かった石川支部は、1/11～2/16の間に12回行い、他に鴨池観察館と同館友の会が2日に1回のペースでパトロール回収している。石川・福井では救護活動も積極的に行われた。また隠岐島などは鳥取・島根両県の支部合同で県職員と共に実施している。

当支部のように、日時・場所を特定せず、会員各自の行動に任せたいというのはなかったようである。今回の経験を踏まえ、今後もしまたこうした事態に直面したときのために、組織的な動きが出来るように予め支部体制を整えておく必要がある。

県内と日本海沿岸の海鳥被害状況

新潟県環境企画課の調べによると、2月末日までに生体で救護したものは、ウミネコ5羽をはじめカモメ類・アビ・シロエリオオハム・ハシブトウミガラスなど1～数羽ずつで計17羽であった。死体回収はウトウが91羽で圧倒的に多く、他はシロエリオオハ

ム11羽、ハシブトウミガラス7羽、オオハム・ウミウ各5羽、カモメ類数羽ずつ計142羽であった。

各保健所に届けられた生体救護・死体回収状況を見ると、佐渡の相川が43羽で最も多く、次いで村上36羽、以下県環境企画課（新潟市）20羽、柏崎16羽、糸魚川12羽、他は10羽以下であった。

環境庁自然保護局野生生物課の2月末までの集計では（県環境企画課に届いたもの）、府県別では石川県の615羽が最高で、次いで福井県の168羽、本件は159羽で3番目、他は京都の103羽、秋田の96羽が多い方。但しこの中にはナホトカ号の事故以外のものも含まれている可能性があるという。

鳥類別に見ると、ウトウ479羽とウミスズメ430羽が突出して多い。ウトウは各県とも多いが、ウミスズメは石川県に412羽と集中している。次いでシロエリオオハム52羽（秋田・新潟に多い）、オオハム42羽（石川・福井に多い）とこの類が多い。カモメ類は多くない。以上は生体救護と死体回収の合計である。

しかし、実際の被害個体数はこの回収個体数をはるかに上回るものであろうといわれる。油にまみれて沈んでしまう死体も多いという。また重油回収時に見つけられた死体も、初期の頃は回収することが徹底せず、重油と共にドラム缶に放り込まれたことも、回収現場で聞いている。

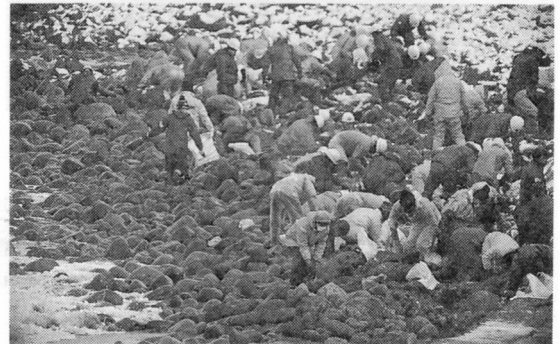
ともあれ、寒い冬の海岸へ出向いて調査・パトロールされた会員の方々、誠にご苦労様でした。このような重油流出によって、いろいろな方面に多くの被害をもたらすタンカー

事故は、今後起こらないよう願うところであるが、それにしても万一に備えて日常の危機管理体制は整えておく必要がある。

ナホトカ号流出重油回収のボランティアに参加して

柏崎市 小林 成光

私が参加したうちの一つに上輪海岸がある。そこは岩やゴロゴロ石の海岸で、回収作業が困難な地域とされていた所だ。海岸に降りると、それは全くひどいもので、すぐに長ぐつやゴム^{がっば}雨衣も重油でベトベトになり、使い捨て状態であった。小さな海岸に100人くらいのボランティアの人がいるのだが、1人で半日かかっても半径1mの回収が終らない状態だ。市外、県外からも多数の団体に参加して頂いたのだが、寒いワ、腰が痛いワ、きかないワで異様に誰もが無口であった。



この冬柏崎の人が寄れば、重油回収の井戸端会議だ。気になる海鳥の斃死体の情報を聞くと、誰もが「そーいえば、あの時、重油まみれで死んでた鳥がいたが、鳥どころではなかった所以对策本部にも報告しなかったなア」である。私の所にも届けられた斃死体は、保健所を通して県に報告してあるが、まだまだ多くの鳥が死んでいたようだ。

発行 1997年3月31日 No.43

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃
日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒951 新潟市東中通1番町86番地28

☎025-229-2018 本間由紀子方 <振替口座>00610-1-6002